2021年度特定共同研究申請書

1.応募領域（○を付けてください） 古代史料領域　中世史料領域　近世史料領域　海外史料領域　(複合史料領域)
2.申請課題名 東アジアの合戦図の比較研究
3.新規・継続の別 継続
4.申請者 須田　牧子（中世史料部門・助教）
5.所内共同研究者 藤原重雄（古代史料部門・准教授）／金子拓（中世史料部門・准教授）／畑山周平（同・助教）／及川亘（近世史料部門・准教授）／黒嶋敏（画像史料解析センター・准教授）／林晃弘（近世史料部門・助教）／岡本真（特殊史料部門・助教）
6.希望する研究期間 2019年度～2021年度　（　3年間）
7.課題の概要（400字程度）　（この項は広報等に利用・掲載することがあります） 16世紀から17世紀にかけて、大規模戦争や王朝交替を経験した東アジア諸国では、社会が混沌から安定に向かう過程で、戦争の記憶を視覚化する様々な画像作品が製作された。日本では16世紀後半期における川中島の戦い・長篠の戦い・関ヶ原の戦い・大坂の陣などを題材にした合戦絵巻・合戦図屏風などが作成され、中国大陸・朝鮮半島においても、嘉靖倭寇・壬辰丁酉戦争などを題材にした戦勲図・武功図が作成されたことが知られる。戦勲・武功を顕彰するための合戦図の作成流行は16世紀～17世紀の東アジア三国に共通する動向であったとも言いうるかも知れない。こうした可能性を念頭に置き、本研究では16～17世紀を中心とした、東アジアの合戦図制作の動向のラフスケッチを試み、その展開・受容過程の共通性と差異の抽出を試みる。比較の視点を持つことで、これまで積み重ねられてきた倭寇図像研究・戦国合戦図研究に新たな切り口が生まれることが期待される。
8.研究の目的（400字程度） 16世紀後半期における日本の合戦図の画像史料としての研究資源化については、先行する複合史料領域研究において成果が積み重ねられたところである。一方、2011-2013年度海外史料領域研究のテーマであった倭寇図像研究においては、本所所蔵「倭寇図巻」・中国国家博物館所蔵「抗倭図巻」が胡宗憲の倭寇退治の戦勲図として作成された絵巻から派生した売絵である可能性が指摘され、これらの絵巻が明代の戦勲図作成の流行という社会現象の中に位置づけられる作品であることが示された。さらに2019-20年度の本共同研究課題の研究成果により、朝鮮王朝期に壬辰丁酉倭乱関係図だけでなく、「国内」の反乱鎮圧の功績を顕彰する戦勲図が描かれていることも明らかとなった。これら同時代における東アジアの合戦図の制作と受容の類似と差異は、作品を受容した社会の類似と差異でもあり、その比較検討は、それぞれの作品分析を深めると共に、中近世東アジアの各地域史研究にも貢献しうる素材と言えよう。

9.共同利用・共同研究として進める意義と期待される研究成果（400 字程度）

本共同研究の前提は、2018 年度まで 10 年近くにわたって長篠合戦をめぐる記憶と記録の集積と分析を中心に展開してきた戦国合戦図研究と、2011-2013 年度の特定共同研究（海外）および 2011-2015 年度の画像史料解析センタープロジェクトとして継続された倭寇図巻研究である。史料編纂所に蓄積されたこれら研究資源をもとにさらなる発展を目指すものであると同時に、分野としては文献史学・美術史学・文学、地域としては日本列島・朝鮮半島・中国大陸、時代としては中近世にわたる研究者の知見がなければ進み得ないという意味で、史料編纂所における共同研究として進める意義は大きい。

東アジアの合戦図研究を進めるなかで、結節点になると予想されるのは、文禄慶長の役／壬辰丁酉倭乱の合戦図である。最終的には、上記の比較研究のなかで生じるであろう研究視角をふまえ、文禄慶長の役／壬辰丁酉倭乱の合戦図が各地域においていかに描かれ、受容されたのかを比較していくことで、総合的に東アジアにおける合戦図の成立・受容を考えることが可能になると予想される。加えて、この研究の過程で関連史料の調査収集を進めることで、文禄慶長の役／壬辰丁酉倭乱が 17 世紀以降それぞれの社会でどのように語り継がれるのかという点について考察を深めていくための研究資源を蓄積し、提供することも可能となると見込んでいる。

10.研究の実施計画

●韓国における合戦図調査の実施：2019-20 年度の成果としてある程度網羅された朝鮮王朝時代の壬辰戦争関連図像および高麗王朝・朝鮮王朝期の国内戦争関連図像のうち代表的な合戦図をいくつか実見し比較検討を行う。2020 年度実施予定だったが、コロナの影響で 2021 年度にずれ込む見込みである。

●蔚山合戦図屏風の調査研究：2019-20 年度の成果として進行中の当該屏風の内容分析と諸作品との比較研究を引き続き行なう。

●研究会の開催：上記の調査成果の検討会、および合戦図に即した個別の研究成果の報告会を随時行ないつつ、年度末に総括シンポジウムを行なう。

●関連史料調査の実施：史料編纂所所蔵史料のうちの関連史料のリストアップと調査を進める。史料編纂所所蔵の中近世東アジア関係史料については、倭寇図巻研究の展開のなかで、最近それと密接な関係を持つ「蒋洲咨文」、および壬辰丁酉倭乱と関わる「明国箚付」の研究が深化し、その結果立て続けに国指定重要文化財となった。しかしほかにもまだじゅうぶんに紹介・活用されているとは言いがたい史料も存在するので、これらの研究資源化を進めていきたい。

11.研究成果の公開計画

3 年目に公開シンポジウムを行なうとともに、それをもとに論文集のかたちで各自の知見をまとめる。また集積したデータは可能な限りデータベースを介して公開し、データベース公開に馴染まないデータについては紙媒体の報告書作成も視野に入れる。

12.共同研究員にもとめる役割

日本史（中近世）・東洋史（明・清・朝鮮）、美術史、文学（日本・中国・韓国）など多様な分野の研究者の参加を求め、各段階において実施する調査に参加し、また研究集会での報告を通じ、「合戦図」の史料的性格を考える。

（記入欄は適宜行数を増減して記入して結構ですが、２頁に収めてください。）